

日本人の自然観と防災

荒井紀雄

(前消防科学総合センター理事長)

私は先頃、フィレンツェを訪れ、イタリア・ルネッサンス期の芸術家たちの作品を見る機会に恵まれたが、ウフィツィ美術館にある「三王礼拝」や「受胎告知」などのレオナルド・ダ・ヴィンチの絵には、“岩石”と“水の流れ”が背景として描かれていることに気付いた。

何故だろうか。私は、かねがね人間の自然観の変遷に関心を持っていたので、レオナルドを始め当時の芸術家たちの自然観を調べてみた。

これは、当時の万物有霊説に基づく自然哲学に由来するという。古代以来、地上の存在は、火、土、水、空気の四元素からなると信じられていたが、人体の解剖も手がけてその構造を知悉していたレオナルドは、地球を人体になぞらえて、大地は肉であり、岩石は骨であり、水は血液であり、海は心臓、火山の噴火は熱で潮の干満は呼吸に照応すると考えた。長尾重武氏によれば、河川の流れによって山岳が作られ、また破壊もされることを知った彼は(それまでは山岳の形成は、洪水神話と占星術によって説明されていた)、「骨」と「血液」を意味する「岩石」と「水の流れ」を描くことによって、自然というもの、人間の生を超えて有機的に生成し消滅することを表現したのだ、という。

人間がそれ自体としては完結するものではなく、宇宙のメンバーとしてすべての存在と有機的なつながりを持った存在であることへの確信、そしてそれ故に宇宙の全存在に対する畏れともいえる敬虔な思いは、人間が文明の匂いから隔絶した大自然の中にひとり在るときにこそ、よく経験することができる。

たとえば、一。ときは午前3時、ところは人里離れた南アルプス、自然の懷に抱かれたようにひっそりと停まっている山小屋の扉を開けてそっと外へ歩み出す。たちまち体は漆黒の闇に包まれてしまう。闇と静けさが支配している山中を歩き出す。

ギーッと木の鳴く音、獣の遠吠え、そんなとき、私は宇宙に潜む万物の霊の気配を感じ自然への畏怖の念を持つ。

この話を或る友にした処、彼は、山で怖いとすればそれは先づ第一に人間に出会ったときだし、次は熊に襲われそうになったときぐらいだろう、と一笑した。

私が経験した畏怖感は、都会で46時中文明に囲まれて過している人々にとっては理解できなくなっているのであろう。万物有霊説自体を科学的立場で云々することは

無意味であるが、その説から自つと演繹される自然に対する敬虔な姿勢や有機的統

一体としての自然観こそ、現代に生きる人間の感性に求められるものではないだろうか。

今日、たしかに大自然の力に対して人力の及ばないことを痛感している人は多い。

さきの阪神大震災の後、平成 7 年 6 月に NHK が行なった世論調査でも、「自然の力に比べ人間の力にはかないものと思いますか」という問いに対して、「そう思う」と答えた人は 91%に上った。また、昭和 57 年に東京大学新聞研究所が行なったアンケート調査でも、「自然の偉大さに比べて人間というものは無力で小さなものだと思うことがありますか」という問いに対して、「いつも思う」と「時々思う」と答えた人は 80%もいた。これらの答はしかし、科学的な知見から直観された感慨に止まっていると思う。

つい一昔前までは、多くの人が災害は天が人間を罰するために起こすものだという

天譴論に共感をおぼえていたものである。

それは大正 12 年の関東大震災直後の総合雑誌などに明らかである。

ところが、それから 60 年後の東大新聞研究所の調査では、「天がこらしめのために災害をおこすという意見についてどう思いますか」という問いに対して、「全くばかげた意見であり共感できない」という人が過半数の 52%に上っている。また同調査で、「災害は人間が自然を破壊したことに対する自然からの仕返しであるという意見についてどう思いますか」という問いに対して、35%の人が「全く馬鹿げた意見であり共感できない」と答えており、「かなり共感」「全面的に共感」と答えた人は 20%に止まっている。

高度経済成長過程を通じて、科学の発達

は人類以外のすべての宇宙の存在を人類のために徹底的に利用することを可能ならしめ、人類はその恩恵なしには生活できず、またいつの間にかそのことを当然と信ずる傲慢さを身につけてしまった。

自然は人間が征服する相手だと考えることは、いわば「持つ」(tohave)姿勢に通ずるものであり、とうてい心の豊かさは実現できない。

そればかりか、快適と利便へのあくなき欲求の裏には、危険が増幅していく。大災害はそれを顕在化して示す。

ここで述べていることは、動物愛護とか自然保護ではない。繰り返すようだが、自然とは人間の生死を超えて有機的に生成し、消滅する存在であること、そして人間もその一員として自然とともに「ある」存在だという認識こそ、防災の基本につながるものなのだ。

人間と自然のかかわりにおいて、このような「持つこと」(tohave)から「あること」(tobe)への意識の転換は、また、心の豊かな社会の実現につながるのである。

(註)ルネッサンス期の自然観については、長尾重武「建築家レオナルド・ダ・ヴィンチ」(中公新書)及び速水敬二「ルネッサンス期の哲学」(筑摩叢書)を参考とした。